

# 漢方の一コマ

## その8 「漢方の病氣に対する考え方」

病氣に対し外感病と内傷病とに分けてとらえています。

外感病は主に気象の変化すなわち外邪(風・寒・暑・湿・燥・火の邪氣)に因って起り、外邪が正氣(人体の抵抗力・体力)を侵して発生する病をさし、その病氣を正氣の抗爭として捉えます。また内傷病は栄養失調、栄養過多、精神的悩みなどにより、自分の体が弱って発生する病をさします。慢性化したものを、とくに雜病とします。

外感病に7つで、どう分けているでしょうか。

- 人体の抵抗力(正氣)が病邪の力より実(充實)しているときは、病邪が弱く虚であるならば、発病しない。また発病しても無症状やごく軽症なので容易に治癒する。
- 正氣が実していても病邪も実の場合は、発病する正氣の抗爭反応も激しく症状は陽症を呈し陽病となる。この病位により更に太陽病、少陽病、陽明病と診断され、各々の病証にしたがって治療される。太陽病とは体表にあり、発汗解表薬で治療する。少陽病では半表半裏(気滯支など)にあり和解薬で治療し、肺炎ほど重症化させないようにする。陽明病とは裏熱にあり清熱劑で治療する。
- もし正氣が虚(礎)の場合、病邪が実であれば、病邪に蹂躪されてしまふ闘病反応が弱く、症状は陰症を呈し陰病となる。その病位の深さにより太陰病(脾胃にとどまる)少陰病(心腎に及ぶ)厥陰病(心身に迫る)と診断され、各々の治療薬が選択される。陰病にはまず正氣を補い、陽病にしてみら病邪を導いて治療する。然し少し抵抗力がある、初めは陽病であつても陰病に転入し重症化し死亡することがあるので、慎重判断が必要がある。
- 正氣が虚していて、例えば癌や糖尿病などの身疾不全や免疫力低下がある場合には、緑膿菌やMRSAなど病邪の弱い常在菌でも日和見感染を起すようになる。些細な外的な環境の変化で外感病を起している場合があることも考えなくては必要がある。

内傷は、正氣の虚に乗じて起る。虚には氣虚・血虚・陽虚・陰虚がある。氣は陽に属し血は陰に属する。正氣を助けること、扶正と言ひ病に対する抵抗力・治療力を増強する。

雜病は身体内部の邪(瘀血・水毒・氣滯など)によつても発症する。この場合は扶正祛邪によつて治療する。